會報

昭和十四年六月　87　日本山岳會

田中阿歌麿先生古稀祝賀

小島烏水

田中阿歌麿先生古稀の祝賀會が、六月十一日、小石川後樂園の涵德亭に開かれた。私は日本山岳會の代表者としてではないが、山岳會誕生時代に、會の雜誌のことで、先生に御世話になつたことがあるので、心の中では、代表者ぐらゐのつもりで參列した。

「山岳」の第一號を發行したとき、世間は、山岳そのものに無關心であり、青年無名の徒輩が發起した（尤も城數馬氏だけは例外であるが）。山岳會に一顧を與へられなかつたに拘はらず、第一號に小川琢治、山崎直方、神保小虎、田中阿歌麿、諸先輩が頒を揃へて寄稿されたことは光榮であつた。以上の方々は、理學博士として知られてゐるが、その頃は、神保小虎氏一人だけが博士であつた。田中先生は第一號に、「湖沼研究の趣味」といふ一文を寄せられ、第三號には「湖沼研究の一例としての箱根蘆の湖」を寄稿され、如何にして湖水の研究を爲すべきものなるかを我々に教へられた。私などは、それに依つて、定常振動だの、水温成層又は逆層だのといふことを教へられた。當時日本では、湖沼學なるものが科學として獨立し得べきものなるや否も明らかでなく、湖沼學に手を染めた田中先生は、斯道開拓の第一人者であられたが、當時は先生と雖も、未だ日本に於ける高山湖の研究までは進んで居られず、自然山岳會なるものにも興味を有せられたのではあるまいかと推察せられる。

初期の頃の「山岳」は、本欄、雜錄、雜報、會報等の欄別があり、雜報は主として諸新聞の山岳記事を切り抜き、貼り付けたもので、誤謬も自然多かつたが、田中先生は自分が檢閲するから、原稿を見せろと言はれ、確か數號に亙つて、刊行前に親しく訂删を施こされたことを、未だに私は德として感謝してゐる。先生の學に忠實なるの致すところとはいへ、賴まれても出來ない仕事だ、と私は今でも思つてゐる。

大正四年、私が職務上渡米するとき、先生の邸宅に呼ばれ、高山湖研究に必要な、組み立て船のやうなものが、米國にあるかも知れないから、調べて知らせてもらひたいとのことであつた。それは諏訪湖のやうな湖水なら、漁船の便もあつて、深度の錘測等にも便利であるが、殆ど人跡未到の高山湖に、船などがある筈なく、自然携帶船が必要なところから、お訊ねがあつたものであらうと考へた。私は、承知の旨を答へながら、渡米以後、かゝる特殊船の有無に就いて、突き留めることも出來ず、竟に御返事もせずに終つたが、先生は、その後、自身で考案せられ、携帶船を造られて、大正七年に白馬岳の大池を、その船を操つられて研究せられた。是より先、大正四年、燒岳の爆發に依つて、大正池が出現すると、先生は逸早く大正池を研究せられたが、日本の湖沼で、先生の研究の及ばざるものなく、富士五湖の中で、本栖湖が最も深いといふこと、日本に於ける最深の湖水は、田澤湖であるといふことも、先生に依つて、私共は初めて教へられたのである。そして、先生が湖水の最深度を測られるのも、我々が山岳の最高點を狙ふのも、極致に於ては同一であるなどと、言ひ合つた。

富士五湖と言へば、先生は、明治十七年十六歳の時、父君に伴はれて富士に登山せられ、初めて富士五湖を下瞰されたさうであるが、湖沼學の第一聲とも言ふべきは、明治三十三年「地學雜誌」に載せられた「富士山麓山中湖の湖底湧泉に就いて」といふ一文であつた。私は當時、それを讀んだときの興奮を忘れない。尤も私も、山の湖が好きで、與謝野寛君主幹の雜誌「明星」に「湖論」を發表したことがあつたが、先生は、當時それを讀まれたと言つて、私に語られた。勿論、私のは科學的論文でなく、今では冷汗ものであるが、先生が、苟くも湖沼に關する文獻には、目を通されてゐたといふことを物語るものである。

先生の湖沼に關する單行本の著書としては、明治四十四年に、新潮社から發行された「湖沼の研究」が最初で、七、八十錢の定價の本が、大震災以後は、一時は十倍の呼び値であつたが、大作としては「諏訪湖の研究」（大正七年）「野尻湖の研究」（昭和元年）「日本北アルプス湖沼の研究」（昭和五年）の三部作であらう。その中の諏訪湖の研究には、先生の囑を受けて、私は所藏の錦繪、木曾街道六十九次（廣重英泉合作）の中、諏訪湖の繪（英泉作）を插繪として、お貸ししたことを記憶してゐる。（勿論、御返品に與かつた）。

先生は、少年時代、中村敬宇先生の同人社に學ばれ、後に父母に隨つて、伊太利、端西、佛蘭西等の外國生活を送られ、東京帝國大學の學閥以外にあつたゝめ、歸朝後も、何々大學の講師を囑託されるぐらゐで、爵位を除いては、必ずしも學者としての好待遇を得られたとも思はれない。その點、牧野富太郎先生と似たやうに思はれるが、併し牧野先生は、もつと早く博士の學位を獲得されてゐる。吾が田中先生に於ては、漸く一昨年、理學博士を授けられた始末で、我豈むくれざるを得んや。しかも、先生は、世間に向つて嗷訴せず、溫乎として沈々默々珠玉の如き人格を包まれてゐる、我豈崇敬せざるを得んや。

さて、肝心の祝賀會であるが、午前十一時過ぎ、鷹司公爵の手から、石井柏亭氏描く所の、田中先生肖像畫、及び記念論文集（陸水學雜誌）を贈呈し、諸氏のテーブル・スピーチあり、式後午餐會に移つて、午後二時頃に散會した、來會者百二十人位であつたらう。

大瀧根山

中村謙

東京の岳人から顧られない山に大瀧根山（一一九二・米）がある。位置は福島縣で、東都から非常に遠ざかつてゐる爲めであらうが、夜行利用の日歸りで悠々と登攀出來るなら、たとひそれが關東の山ではなくとも、我々東京人の山でないと誰れが云へよう？　のんびりした高原狀の山で、容易に登頂出來るばかりではなく、眺望廣濶、かてゝ加へて附近には地質學上興味深きカルストの荒蕪地あり、大小幾多のドリーネが點在し、オーヂルや石灰洞もあつて、一日の山歩きにはありあまる收穫がある。費用も東北線から常盤線への廻遊券を購入すれば六圓二錢にて事足るわけである。

土地の人々は非常に澤山登る山だが、東京人が殆どよりつかぬせいであらう——地質學上の文獻は別として、登山に關する文獻はあまり見當らぬので、好事家の爲めに一筆認めて見度いと思ふ。

我々が上野を立つたのが午後十一時十五分發の夜行であつた。眼をさますと早や關東をはなれて福島縣に這入つてゐる。郡山で盤越東線に乗換へ、午前六時三十二分には夏井川と大瀧根川との分水嶺に在る神俣驛についた。飛鳥驛長と盤城セメントの根本龜吉氏の好意でガイドを一人つけて貰ひ、驛を發足したのが七時半。

麥畑を通り抜け、和貢の部落を過ぎて、夏井川の源流をどこまでも遡つてゆく。その中に大山祇神社の前を通つて牧場の入口にさしかゝる。こゝで川内街道と別れて左折、牧場から赤松の林に入り、更に十五分ほどもすると、清々しい濶葉樹林に入る。附近に栗の木が多く、秋は栗拾ひや茸狩りには好適だといふ。潺湲たる溪流の音を耳にしながら、どこまでも潤深い樹林帶を進んでゆく。さうして傾斜が稍ついたなあーと思ふ頃、山根村と瀧根村との村界に辿りつく。のんびりした芝生の鞍部で放牧されてゐる馬が三々伍々見うけられる。

これより漂木の間を穿つて十分ほど登れば「蟻の戸渡り」とて花崗岩の滑らかな斜面に出る。鎖や梯子が用意してあるから山慣れぬものでも容易に突破出來る。

アセビやツヽジの群落の間を縫つて緩々登るうちに、いつしか瀧根神社に辿りつく。三角標石は直ぐその上だ。頂上附近は見渡す限りツヽジの大群落に彩られ、のんびりした丘陵がどこまでもつゞいてゐる。これが阿武隈山脈の最高點とは誰れも考へられない。近々と鎌倉岳、移岳、羽山、萬太郎山、矢大臣、遠くには藏王山、吾妻山、安達太郎、盤梯山、那須岳、高原山が手に取るやうだ。晴れた日には太平洋の煙波さへ望むことが出來るといふ。時に正十時。

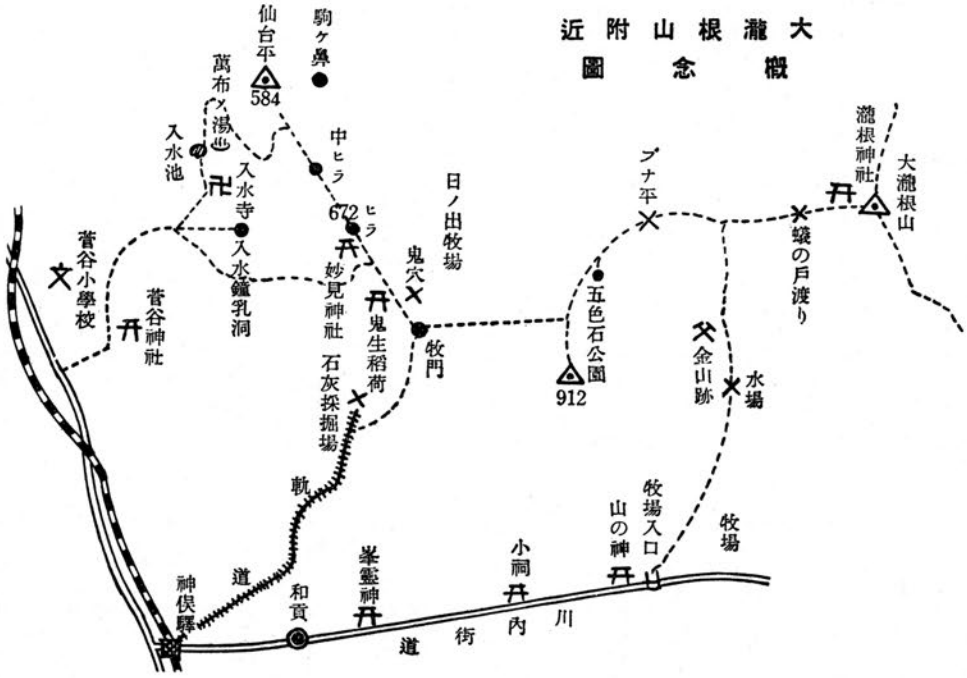
下り路は元來た村界尾根をどこまでも傳つて七色石公園を過ぎ、高戸屋との鞍部から右折して日ノ出牧場に入る。こゝに最も大きなドリネがある。その西側の六枚屏風岩の上の方には「鬼穴」と稱する石灰洞が大きな口を開いてゐる。

鬼穴から西に小徑を這ひ登ると直ぐ鬼生稻荷のところに出る。これより駒ケ鼻までが所謂「仙臺平のカルスト」で、長さ二粁、幅五百米位。のんびりした丘陵が、なだらかにどこまでもつゞいてゐる。石灰岩の露出したものや、所々に赤松が點々としてゐる他あとは一面の芝生だ。何んと氣持がいゝのだらう！　明快なうちにもどことなく東北獨特な暗さのあるのが却つて面白い。あちらこちにドリーネを覗き込みながら愈々

目次

・田中先生古稀祝賀　小島　烏水　一
・大瀧根山　中村　謙　二
・新綠の金剛山　茨木猪之吉　三
・積雪期木曾駒　小島　政士　四
・山の蒐書入門　續　中島　杏子　六
・瑞西ヒマラヤ遠征　吉澤　一郎　六
・新幕の湯の老夫婦　菊地　孝八
・河野先生を憶ふ　武田鎌次郎　九
◇新著紹介　一〇
◇會員通信
野口、高木……一一
◇會務報告……一三
◇收支決算報告……一三

大瀧根山附近概念圖



最後の上りにかゝらうとした時に、俄然雷鳴をきゝ驟雨に見舞はれたので、中平と仙臺平（△八五四米）との鞍部から下山してしまつた。

入水池のほとりにある萬布ノ湯で、しばしの雨宿りをし、霽れるのを待つて入水鐘乳洞の見學に赴く。時に三時。

この鐘乳洞は昭和二年の發見にかかり、長さ約六百、幅一米乃至二米、高さ五米乃至十米のもので、大きさの點に於ては從來世に知られてゐる幾多の石灰洞に比し誇るには足りないが、「いくら早く見學しても優に三時間はかゝりますよ」といふ言葉に聊か辟易し、いづれ出直すことにして入口だけを覗き、そのまゝ歸途に就く。かくして神俣驛に辿りついたのが午後四時五十五分。驛長さんや根本さんにゆつくり御禮を述べる暇もなく、五時八分の汽車に乘り、平驛で乘換へて十一時二十九分には上野驛に歸着した。

登路はいくつもあるが、大瀧根山と仙平のカルストや鐘乳洞の見學を結び付けるなら、矢張り我々の通つたこのコースが最も面白いと思ふ。その他大瀧根山から羽山・矢大臣を縱走する環狀コースや、有名なアヲモリガヘルの棲息する平伏沼（一名延命沼）を訪づれるのも興味深いものがあらう。

五萬分ノ一陸測圖は「小野新町（ヲノニヰマチ）」と「常葉（トキハ）」を參照のこと。

新綠の金剛山

茨木猪之吉

京城へ着いた頃は、そろ〳〵芽出しで灰色の空と赤土の山が印象的でポプラやアカシヤの芽出しも美くしい、早速郊外の高臺から寫生にかゝつた、當地三越ギャラリの個展も近づいたので準備やら或は內地から滿洲行の連中やらで多忙を極めた。

どうやら展覽會も終了して、一段落つき、早速、地圖や案內記に目を通し、鐵道局旅客課から便宜を得て飛び出したのは夜行十一時だつた、鐵原驛の乘換へは深夜二時近く、忙てゝゐたか時間の連絡を失し、驛前の淋しい旅館で三四時間休む、八時二十五分かの電車で內金剛へ。

田舍の風物も別に特色なく、車內は半島人が七割でノロ〳〵登りは睡い事頻りなり。やつと內剛驛に下車して、すぐバスで長安寺山門前着、夕方までの時間があるので一泊と決心して、寫生に出る。溪谷や水が美くしい岩山は申までもなく、少々箱庭的ではあるが奇岩怪石は文字通りで別に驚ろきもしない。之れより、この處のお寺の生活なぞ面白いと思つた。夕方雲性門の傍、唯一旅館（朝鮮）の溫突（オンドル）に寢そべつて良い心地だつた。喰ひ物には少々遠慮したが、なに落着いて之れも旅なればと決心すれば又別段の味がある、と考へたが、遠ざかる氣持の方が大きい、それでも夜行と寢ぶそくと空腹で、どうやら寢込んでしまつた、精しい事は他の機會で。

早朝起きたら五月雨で寒い位、森が暗い中に若葉の水々しさは有難たい。一たい半島は雨がない話を聞いてゐたが、尤も山家では別でせう。河原へ下りて顏を洗つて、例の朝食、人夫も案內者も御免を願つて飛び出す。流石は五月下旬の溪谷は好ましく水清く、「三佛巖」や中景に必ずお寺なぞ取り入れた風景は、南畫向でよろしい、極彩色は少々閉口するが、「表訓寺遠望」は一寸描きたくなる。「普德窟」で休息して、之れから登りも多少なれば煙草の用意と、道草食ひの準備も出來た。

雲頻りに動く、小雨もあり、登山道最もよろしい、所謂名所が多いので樂しみも深まる。尾根近き頃天候變じ雹なぞ降つて來た、汗ばんだ顏面にも冷たい風も當る。久米山莊に降る、晝頃だつた、かねて寫眞によつて拜見してゐたが、中々立派なヒユツテ、だが設備やら嫌に行き屆いてゐるので、ホテルじみてはゐるが、ぬれ鼠の團體が押しよせて來たのは山小屋らしい。ストーヴをドンドン焚く、聞けば京城の同和樂房會社の五十七名だつた、レコードをかける、ガア〳〵さはぐのは、よくある風景だ。半島人でも若いのはモダンで話も少々解る、中には八十歲近い翁を長く延ばした特色ある風格は大人的で氣持がゐゝ。

僕は第一に小室に陣取り、入浴して食堂に出ると、動かぬ汽船の樣だ。夜は雨が雪となり、思はぬ雪景色をこの地で接するとは想像しなかつた。翌朝はまだ〳〵日光を見ない、白樺の板や道にも雪つもり、時ならぬ趣あり、だが春雪で九時頃には靑空も出て、北へ北へと雨雲も去る、お客は出拂ひ靜かになつた。

カンバスを抱へて「崑盧峯」一、六三八米へ登る、午後からよく晴れて、例の岩峯を遠く海を眺めのんびとする、「永郎峯」へ行く、若葉には早いが樺の芽も赤味を帶びてゐる、カタクリの花盛りなり八號を仕上げて、山莊へ降る。靜かな夕方だ、ベランダに出て見渡す氣持はわるくない、突然全く突然背後から柔かい聲をかけられ、見ると關西理事の水野祥太郎氏だつた。城大の學會に來てすぐ仲間の十四五名と登つた、との事、忙がしいのと暇がないのを繰りかへし申てゐた。夜はビールで雜談に耽ける。

翌朝は素晴しい天氣で崑盧峯へ日の出を拜す。恰度、女學生の團體と一緒になる、降り乍ら女先生らしい氣の氣いた人に話を聞いたら京城の明かに進むであります、進明高女三年生、四五年は內地に修學旅行、之れから內金剛を見學するさうだ、京城へ來たら私の學校へ來てくれと社交的に挨拶する、忘れられぬ女先生だ。水野君の一行と右と左に別れ、獨りブラ〳〵谷添に降り、明るい朗々とした、瀑、多き事、「朝陽瀑」は大きい、この所に一家山住居の若夫婦が茶店を出してゐる。暫らく休んで右の細い道を登る、柔かい靜かな峠道だ、地圖に「三聖庵」としてある、峠から前景に芽出しの樹木を入れた「勢至峯」「五峯山」「文珠峯」の岩壁は素晴しく立派で雄大だ、辨當を食して暫らく遊ぶ、ヤケに下る事俄然脚を傷める、而し若葉の森蔭は初夏の趣あり、獨り喜び勇む。

茶店に荷を下し、「奧萬物相」の風光を訪ね、成程と感心した、戻つて清水を四五杯飲む、このあたりが外金剛のよさか。名所地なれば杖を引く客多し、ブラ〳〵降る、清流がさはやかで岩峰が屏風立に、あかず眺める、バスの處まで來たが待つ時間が長いので歩く、やがて溫井里に着く。田舍家より「水晶峯」を見た所は油繪になる。コンクリーの橋を渡ると「溫井里」の街だ、河原が白く例の洗濯女が奇麗だ、ゆるりと一泊する、翌日、鐵原へそして夜行で再び京城に。

五月二十二日

第四回山岳畫協會展覽會

七月十日(月)—七月十四日(金)

日本橋高島屋サロン

積雪期木曾駒に於ける二つの行爲

小島政士
跡部昌三

積雪期木曾駒に對して限りなき思慕の情を寄せてゐる我々名古屋山岳會として、本年も二つの山行をものにする事が出來た。一つは伊奈川本谷の支流東川本谷の溯行であり、一つは伊那より木曾への木曾駒本岳のトラヴァースである。簡單乍ら報告さして戴く事にする。

東山本谷溯行

雪の空木岳へ。嘗つて積雪期に於て試みられた事のない東川本谷をルートにとつて頂に立ちたい事をのぞみ、この三月漸く完成を見た。之は昨年三月に計畫したが、種々な事情によつて中止し、正澤谷から細尾澤をルートに木曾駒本岳行に變更して本年に持ち越されたもの、此の行の爲昨秋偵察行を豫定してゐたが、遂にこの實現を見ず、全く白紙のまゝで臨んだ。尙木曾側よりする積雪期空木岳は我々の仲間によつて、昨年の三月、木曾殿越經路にルートを選んで、木曾殿越より登頂せられてゐる。

パーティは三名(學友二名)、人夫は第一日のみ使用、根據地は伊奈川本谷經路と木曾殿越經路の分岐點にある東川本谷御料小屋を使用することゝして、當局より之の使用許可を得、昨年の十一月、一部の荷揚げをなして置いた。

三月六日、曇後雨

須原より倉本を經て大澤右岸の尾根を登り、中八丁の乘越を越えて伊奈川本谷に下り、伊奈川本谷左岸の經路を東川本谷御料小屋に一八・一〇〇着。スキーは中八丁乘越への登り通稱イザルボテより穿く。乘越より伊奈川本谷までは輪橇、その後はスキーと輪橇を半々に用ふ。

三月七日、雨後曇

雨降りであるし、休養とする。

三月八日、快晴

東川本谷北澤出合に前進根據地を設置すべく、六・五〇スキーを穿いて小屋をあとにする。木曾殿越經路に沿つて登り、一六五二、三米三角點の南の肩から東川本谷めがけて直降、雪質惡く、木曾駒獨特の腐り雪にて時々腰まで落ち込み難澁する。北澤出會は廣々として氣分のよい所、一三・三〇につく。充分に栂の葉を敷いてウィムパーテントを張る。此の日小屋へ戻る。

三月九日、晴

殘餘の荷をテントへ運び、上流南澤出合まで偵察する。暗瀧(くらがり)を捲くのに苦勞したのみ、あとは面倒なだけである。

三月十日、晴後雨

テントを六・〇〇に出る。七・〇〇に南澤出合につく。此の附近まで積雪は充分でなく、七八回スノーブリッヂを利用、これより積雪量は增し、河原の凸凹も減じて右岸寄りに樂に登る。南駒の北から出る中山澤の出合へは八・〇〇着、雪質よく歸りを愉しみに登行をつゞける。この先にて本谷は小さな瀧となり、空木岳直下から出る澤の方が大きく、ために本谷を見逃して大澤(假稱)へ入り、二〇m位の瀧に一時間程の苦戰の揚句に此の間違ひに氣づき、引返して本谷を登る。本谷は猛烈な傾斜の一本通しの澤、シール等を祓度に利用して鐵砲登りを續ける。この頃天候が惡化しはじめる。左から一本、右から一寸大きな澤が入り、一一・五〇木曾殿越に出る。此のコルの伊那側は素晴らしい積雪であるが、木曾側は極めて少ない。此處をシーデポとして空木岳に向つたが、天候惡化して一四・四〇頂上直下より引返す。木曾殿越よりスキーに繩を卷いて直滑降、廻轉など思ひもよらぬ狹い谷であり、小瀧が連續してゐるため傾斜はきつい。大澤の出合からは優秀に飛ばして歸る。南澤出合より遂に雨となり、テント歸着は一七・三〇。木曾殿越からテントまで二時間。

三月十一日、雨

テントは雨もりで大騷ぎ、夜に入るもやまず。

三月十二日、雨後曇

すつかり濡れてしまつたので、一まづ小屋へ引揚げる事にする。他に計畫してゐた事も、心のない雨の爲に放棄のやむなきに至る。

三月十三日、晴

テントを撤收する。

三月十四日、晴

往路をとつて下山する。皮肉なもので山を出るのに續く晴。(小島)

木曾駒本岳横斷

輪橇の代用や、スキーを酷使するのでなくして、スキーによる木曾駒登高は兼ねての念願とするところ。昨夏太田切發電所の唐澤善八氏を訪ねた折、赤穗道がスキールートとしていゝ事を聞き、私はその足で赤穗道をよく調べて本岳を越えた。玆に於て長い間の宿望を果すことと、木曾側に於ける唯一のスキー可能ルートである福島道を結びつける事に思ひ至り、この三月之を試み、最後といふ處で殘念乍ら失敗を見た。以下その行に就て報告する。

パーティは跡部、加藤、それに前記の唐澤氏が本岳まで同行される事となつた。裝備はスキーを有効に生かすべく輕裝を念とした。

三月十九日、曇時々晴

太田切發電所に八・三五分着、唐澤氏と共に出掛ける。二合目よりスキーを穿き、三合目蛇腹小屋に一三・五〇着。積雪この邊りで六・七〇糎。加藤は炊事に殘り、二人でラッセルと一部の荷揚げに行く。夏道沿ひに跡部は四合清水平まで、唐澤氏は五合目まで、歸りは面白く飛ばして小屋歸着は一八・三五。

三月二十日、小雪後曇、吹雪。

小雪の降るなかを二・三〇出發、五合目で夜が明ける。雪はやむ。ジクザクを描いて森林帶を拔ける。この頃よりガスと風が加はり、九・三〇、七合目でアイゼンにかへ、スキーはルックザックにつけて進む。前岳を越える頃は寶劍岳の接空線がどうにかそれと見えてゐた。一二・五五宮田小屋へ、小屋は屋根のみ。木曾側より吹きつける風が凄く、中岳小屋の傍でツェルトによつて少憩。唐澤氏は今日下山の豫定、私達は本岳を越える豫定であつたが、唐澤氏は待望の寫眞がとれず、私達は寶劍岳に登れぬのが心殘りなため一三・二五で早かつたが、明日を期待して中岳小屋に假泊することにする。

三月二十一日、晴、强風

雪煙が猛烈に稜線を這つてゐる。六・四〇小屋を出て寶劍に登る。唐澤氏は寫眞をとりに本岳へ。風强く寒氣は嚴しい。眺望は素晴しくいゝがゆつくりしてゐられぬ。荒れつゞきのため岳々は嚴冬の莊重さ。八・三五小屋へ戻る。唐澤氏は强風で寫眞も撮れなかつたと。用意して九・四五に唐澤氏と共に小屋を出て、本岳の頂に立つ。風は幾分鉾をおさめ漸くシャッターが切れる程度、四五分も頂上に居て唐澤氏と別れ、木曾

側へ降る。玉ノ窪でスキーをつけ一一・一二福島道の見當をつけて滑降する。素晴しい。愈々トラヴァース道になる邊りから福島道の見當つかず、森林帶へ這入つてからの急斜面ではクラストに新雪二・三〇糎でよくずり、急傾斜の露岩が出て捲く頃より遂にアイゼンにかへる。一向能率があがらず、七合目の避難小屋もさほど遠くはないと思ひつゝも、蛇腹小屋を出る時二日分の食糧を持つて出たのみとて充分でなく、はつきりせぬ福島道を求め辿る事の非を思ひ、駒石の尾根より下らうとして更に輪標をつけて尾根めがけて攀ぢ登る。この登りが鼻をつく樣な急斜面で、スキーは持つてゐるし、クラスト面が破れて腰まで落ち込みする等、僅かな距離に約二時間も苦戦して尾根に出る直前の岩場を前にする。その頃はもう日が暮れかゝつてゐた。岩場が手强くて登り切れず、少し戻つてツェルトビワークする。

三月二十二日、曇後風雪

豫定の二日分の食糧は昨日で終りであるが、既に制限してゐたのと、若干の非常食があるのみにて、このまゝ進むより、玉ノ窪へ戻つて上松道を下つた方が却つていゝと思ひ引返すことにする。いくらどち踏んでも五合金懸小屋まではと、八・五〇登つたところを降る。スキーをはく頃からガスが捲き始め、雪がちらつく。その内に全然視界がなくなり右山で進む。前日のスプールはもうない。可成り進みどうも變だと思ひ、軈て木立の樣子で玉ノ窪への登りを通過して細尾に沿つてゐる事に氣がつき引返す。この頃より食糧の缺乏による制限でビツチあがらず、玉ノ窪の白い斜面にジクザクする頃は風雪となり、屢々立止つたりして遲々として進まず、漸く玉ノ窪の小屋についた時は一八・一五で、宵闇が足元に漂ひ始め、風雪で何も見えず、動く事すら出來ない狀態であつた。小屋は屋根も埋り石垣がほんの僅か出てゐるのみ。ツェルトを出してビワークする。斜面であり、完全な事も出來ずで、ツェルトの中へ容赦なく雪が吹き込む。夜更けて雪やむも、風は物凄く咆哮をつゞけ、ツェルトを間斷なくあふる。此の日の食糧は二人で携帶口糧一個、熱量食一個、保餅二個。あとは森永の乾パン一個を殘すのみ。

三月二十三日、吹雪

一〇・〇〇頃まで待機したが依然として風おさまらず、たゞ乳白の荒れ狂ふ世界。前岳を越しさへすればと思ひ、乾パン一個の半分を二人にて分けツェルトを出る。あらゆるもの一切が凍結してしまつてゐる。歩きかけたものゝ雪面の高低が判らず、やつと一〇米程も進んだが、それ以上危險で進めず、再びツェルトをかぶつて時の來るのを待つ。一二・〇〇頃殘りの乾パンを二人で食ふ。もうあとは食ふものは何もない。一二・三〇到底降れる見込みがないとすると、此處に止まる事の不利を思ひ、木曾小屋へ避難する事にしてツェルトを出、やつと木曾小屋へ這入り、一夜を明かす事にする。

三月二十四日、晴、强風

依然として風は猛り續けてゐたが陽が射してゐた。八・四五小屋を出る。一昨夕玉ノ窪小屋の石垣の傍に置いたスキーを堀り出してルックザックにつけて前岳にかゝる。滑川側からの風が、前岳の尾根から雪煙を垂直に高く擧げてゐる。素晴しい壯觀に一切を忘れて見上げる。三ノ澤岳が最も立派だ。前岳を越え、栂の出て來る頃より輪標にかへる。相當もぐり、時には腰まで落ちして容易にはかどらぬ。途中スキーを使つてみたが、餘りよくもなく、腹に力がなくては思ふ樣にはいかなかつた。一七・二五金懸小屋に着く。四合半位から暗くなり、小雪がちらつき、軈てみぞれとなる。一九・四五になつて敬神小屋に這入り輪標をぬぐ。此の日一物も食はず、休憩といつては金懸小屋の二〇分のみ、遲々としてゐたが休まずに歩き續けて來た。漸く此の小屋で食糧にありつく。更に上松へ出ようとしたが、みぞれは雨となりザア〳〵降つてゐるので泊る事にする。翌一・三〇蒲團の中へ入る。夜行で赤穗につき、その日蛇腹小屋にて四時間たらずの睡眠を採つたきり、其後うと〳〵と微睡むんだ事はあつたが横にならず、五日目に至つて初めて足を伸ばして寢る。

三月二十五日、小雨

小雨の中を上松に一二・四五元氣よく出る。三日間かおそくとも四日間の計畫が、一週間になつてしまつた。（跡部）

追記

スキーをもつて本岳を横斷する計畫は三分の一を殘して挫折してしまつた。併し此の希望と可能性は今以て失つてはゐぬ。結果から見れば、迷はずに福島道を衝いた方がよかつたであらう。併し山姥の床の前後の棧道だけはうまく攝みたいと思ひ、それに牽制されたのと、食糧の缺乏から早く勝負したいと思つたのが、それに惡天候が介在して、却つて逆の結果を招いてしまつた。福島道をやつてゐれば風雪に煩される事はなかつたと思ふ。とまれ此の爲に嘗つて經驗した事のない事共を自身のものとなし得たのは、何と言つても大きな收穫であつた。

最後に言及したい事は、スキールートとしての赤穗道の事である。おそらく木曾駒隨一といつて差支之なからう。スキールートといつても殆んど夏道を辿る。筆者達が最初の旅の者である等、今迄世に識られなかつたのが不思議に堪えない位である。木曾御岳などより、假りに黑澤口と比較すると、泊場の位置から登頂は骨が折れるが、スキーを愉しむ點に於ては、赤穗道の方が遙かに優れてゐる。だが三合迄の登りは兎も角、降りは細い夏道通りしか動きがとれず苦しいのと、蛇腹小屋から尾根にとりついて暫くは夏道を知つてゐないと苦戦せねばならぬ。その上の一寸した平へ出れば、あとは樂に行進出來る。が、ジクザクの小さいのは辛棒せねばならぬ。

泊場の關係上、蛇腹小屋を第一日として、その日出來るだけラッセルをして、翌二・〇〇發ち位にして本岳を往復、この日を再び蛇腹小屋泊りにすれば無難であらう。早く片付けば赤穗へ出るもいい。蛇腹小屋は御料のものであり、宿泊する場合は前以て諒解を得ておくべきである。

雪質はその時によるから何とも言へないが、私達の場合は非常に好調であつた。しかし、概して木曾駒獨特のよりどころのない雪であるときが多く、此點充分注意して計算する必要がある。デポは七合か八合、言ふ迄もないが新雪直後などは上げられたら出來るだけ上げた方が賢明である。

尾根は別に痩せてもゐず、滑降は素晴しいものに屬すると言へる。五合から四合など特にいい。登りに勞苦する尾根の取付は、時によつてはスキーをぬいだ方が特策である。

此の赤穗道は、前記唐澤善八氏によつて開拓せられたものであり、此點氏の勞作に對して敬意を表せずにはゐられぬ。（跡部）

山の蒐書入門 續

中島杏子

僕の外祖父の家は神島屋と云つて寛政時代から酒を造つて居る。現當主である從弟（山岳會員）も從つて酒屋の主人公である。この神島屋は代々町役人である肝煎役を勤めて來た由緒ある家柄であつて、然かも昔から裕福の聞こえ高かつた丈け代々に粹人が多かつた。

僕の祖父も其又祖父に當る人も三味の一つも彈け歌俳諧森將棋何でも御座れでおまけに蒔繪の一つも塗れると云ふ器用な人だつた相だ。昔は珍らしかつた青表紙や浮世草紙、洒落本は何より好きだつたと云ふ。この人の殘した軟派物の和本が山の樣に藏の中にのさばつて居て、毎年夏になると其蟲干が本好きな僕の仕事の樣になつて居た。廣庭に蓆を二三十枚も敷きつめ古本を山の樣に持ち出し烈日の下に曝すのだが、これが三日も掛ると云ふ大仕事だつた。この間僕は藏男二三名を指揮してシャツ一枚に檜の大笠を被り勇氣凛々と云ふいで立ちで働いたものだつた。

此の大量の古本も祖父の鐵道事業の失敗から家政整理をした時大部分二束三文に賣り拂はれてしまつた。今でも目に殘つて居るのは歌麿の蟲撰の美しい繪本だつた。之等は考へれば考へる程惜しかつた。

然し僕を可愛がつてくれた祖父は僕の心を汲んで呉れてか僕の一番欲しがつて居た古俳書と地誌名所圖會を賣立ての中から殘して置いてくれて之れは「祖父のカタミだ」と云つて小さい本箱に二杯許り量にしては僅かだが折りから歸省の僕に贈られた。祖父に對して何時も我儘に振舞つて來た僕で今度の古本賣却に對しては大不平を洩らさうと意氣込んで來たのだが、此の時の祖父の心根を察しては何んにも云へず思はず涙がこぼれた。貰つた地誌類には珍らしい物が多かつた。京童や同跡追、長崎蟲眼鏡、山城名所記さては日本國圖と云ふ樣な寛文延寶頃の稀本類も多かつたし江戸名所圖會、都名所圖會、一目玉鉾、日本名山圖會の樣な物もあつて段々古書値が判るにつれて祖父の好意が並みならぬ大きさであることが身に浸みて來た。其後高頭先生の日本山岳志を入手して名山圖會から拔き出した山の繪が立派に挿圖となつて居るのに瞠目して改めて丹念に圖會など見直したのであつた。神河内の記事のある善光寺道名所圖會などは小鳥先生が山岳にお書きになつて始めてそれと知つて寶の持ち腐れと自ら呆れたのであつた。

之れがそも〳〵山岳に關する和本の興味を覺え出した初めであつたらう。以來少しづゝ興の赴く盡に山に關する物を集めて見たのだが祖父に貰つた地誌類の三分の一も集まらなかつた。震雷記や諸國名山往來の樣な物でさへ數年目にヤツと入手出來た。幾らでも有る筈の薄つぺらな往來物の湯殿山詣や南部恐山詣も一寸見つからなかつたがどうにか揃つた。尤も御嶽詣や大山詣さては戸隱詣は今に入手出來ぬから何んな本か一寸判らない。

驚喜したのは信濃國蓼科山略傳記

瑞西よりのガルワール・ヒマラヤ遠征に就て（一九三九年度）

吉澤一郎

最近到着した瑞西山岳會機關誌"DIE ALPEN"五月號に、同國にある「國外山岳遠征財團發起委員會」が、本年瑞西から出發したガルワール遠征に就て書いた一文があつたので、玆に簡單に御紹介する。

×

吾々は瑞西山岳會の會員諸賢に對し、吾國登山家の小團體が英領印度のクマオン地方にあるガルワール・ヒマラヤに向ふ目的を以て已に故國を離れた事を玆に報告するの機會を得た事を欣ぶものである。四人の遠征隊員は五月十日ヴェニスに於てコンテ・ヴェルデ號に乘船、同月二十二日ボンベイ到着の豫定である。

多くの人々は此の遠征に對する費用の出所に就て疑問を持たれる事と思ふ。吾が「國外山岳遠征財團發起委員會」は三萬法の資金募集に成功した。之を以て大體一つの遠征隊派遣の目安を得た次第である。外部に對する募集も勿論行はれはしたが大した效果は得られなかつた。然し乍ら吾々は吾々の努力に多大の援助を惜しまれなかつた少數の支部並びに會員諸賢に對し此の機會に於て衷心より感謝の意を表したいと思ふ。

資金獲得當時は未だ入國許可證を得て居らず、從つて確たる計畫は決定するに至らなかつた。之が爲めには是非とも一度ロンドンを訪問するの必要を痛感したのである。許可證の入手に關してはロンドン駐劄瑞西公使パラヴィチニ氏並びに英國山岳會々員ストラット大佐の努力に負ふ所多大なるものがあつた。

準備にとりかゝつたのは四月の中旬で、五月六日には表面に「瑞西登山隊」と書かれた二十五個の荷物がチュ！リヒの停車場に積上げられた遠征の目的並びに隊員に就ては後に述ぶるとして、まづ前置きすべきは吾々の今回の遠征が決してスポーツ的の目的を以て僞裝された科學的の遠征ではないといふ事である。今回の吾等がヒマラヤ行は二人の吾が最優秀なる山案内者の參加する登山家の遠征である。從つて隊員中の一人のみが專門的に科學方面を受持つ事になつてゐる。

隊長はジュネーヴの技師アンドレ・ロッシュ。彼は一九三四年に行はれたディレンフルト教授の國際ヒマラヤ遠征にも參加せるヒマラヤの經驗者にして、一九三八年にはチューリヒのアカデミッシェル・アルペン・クルプのグリーンランド遠征に參加、之が隊長となつて輝く成功を

を獲た事だらう。これは山岳の展覽會目錄で七葉一册本となつて居るが僕のものは二册上下と題筌にちやんと明記してある原本だ。又悲觀したのは今迄岳人に知られて居ない信州松本町大坂屋施印本の信州鑓ケ嶽略緣起と云ふ珍本を逸した事だ。

出羽の三山の故事を記した寶永七年版の三山雅集三册は山岳物と云ふより古俳書として長らく探して居たが漸く最近端本二册を入手した。先頃の富岡鐵齋先生の賣立に三册の完本が出陳されて居て欲しかつたが遂に及ばなかつた。山許り書いた俳書では明和四年版の秋の寐覺と云ふ物がある。之れには著名な山名が三四百も揭げられて居るのだが所謂名所歌枕を主として扱つて居る丈け些か本來の山岳と云ふ的から外れて居る

富士山に關する物は汗中充棟で一寸手を出すのが臆劫だ。然かも之れには名立たる蒐集の大家が大勢居られる故僕には手を拱いて居る方が安全だと思つて居る。然し八十八歳で富士登山した堯甫の記念詩集や食行身錄行者の修業の卷子や幕末の富士登山の入用帳等は紙屑同樣に入手出來た丈け案外人目に付かぬ物に貴重な資料が有ることが痛く感ぜられた

繪圖もいろいろ蒐めて見たが矢張り飛驒國や信濃國の繪圖に興味を引かれたが珍らしい物は無い。只一つ信濃國の繪圖で元祿頃の作圖を後年修正を加へつゝ將來したと覺ぼしい四疊敷大の珍物が容易に入手出來た事は僕の樣な入門者の誇つてよいことだらうと思ふ。

一枚摺ではお國柄丈けよく集つた物は立山禪定繪圖である。之れは享保以降で異版を二十四五枚揃へた。大體禪定繪圖は施版の物丈け版は種々雜多で岩峠寺と芦峠寺とでも多少圖柄が違ふ。襄顯からして岩峠寺の物は立山禪定名所附圖別當岩峠寺とあり芦峠寺の方は立山禪定並略御緣起名所附圖とあつて別當岩峠寺が斷然權威を明示して居るのが面白い。此の繪圖の內容やら圖柄に付いて此の兩寺が度々爭論を繰り返し昂じて加賀藩の御公事場迄　恐れ乍らとやつて出たものだが天保末年の裁斷で岩峠寺の權威が認められて落着した此の間の事件の面白いいきさつは何れ筆を改めて書いて見たいものだ。

僕のこの立山禪定繪圖の蒐集に近頃大變な相手が出來た。金澤市の古書籍商近彌二郎君である。君はマニヤに類する方で親鸞上人の一枚摺を遠く鎌倉時代から蒐めて既に百枚以上のコレクションを完成し某宗教大學圖書館を淡殺して居ると云ふ豪の者で相手にしては仲々手剛い。近日も一寸立寄ると立山繪圖を早や十數枚許りも揃へて悅に入つて居るので閉口した。

一體和本の蒐集はいくら焦つても何うにもならず又求めず共ポンと入つて來る所に何とも云へぬ深々たる滋味があるものだ。殊に山岳古書は他の古書と違つて百金千金を積む必要なく努力次第で機會均等的に其滋味を滿喫する事が出來るから何としても有難い。この滋味には又蒐集家卽ち岳人自身がかつて經驗した事の樂しい追想の世界へ先人古人を拉して來て相共に笑ひ語るを得ると云ふ想像も及ばぬ大いなる歡喜が附加されて居る。

まだまだ蒐書入門者に過ぎない僕には祖父から貰つた物が今でも依然たる蒐書の大宗であり僕の凡そ蒐めたものは入門者にふさはしい片々たる景物に過ぎないが何時の日か僕の支配する山の書籍國の記を小島先生に負けない樣な雄麗な筆致で書いて見たいものだと考へて居る。

おさめ、北米ロッキイには再度の登攀を行つてゐる。彼は今回の遠征の責任ある且つ嚴正なる指導に任すべき保證を與へて吳れた。彼の助手としては瑞西に於て最も優れたる二人の山案內者が同行する。一人はグリンデルワルトのフリッツ・シュトイリ

(子)——その父は餘り知られてゐない——で、彼は自己の榮譽にかけても立派な業績を擧げる事と思ふ。ビュントナー地方の山案內者たるダヴィド・ツォグは極めて優秀なる氷登攀(アイスクライミング)者である。二人ともに寂寥地域(アインザームカイト)の體驗者であつて、ルイス・トレンカーと共にグリーンランドへの遠征を行つてゐる。而して以上の三人は互ひに十年以上の親しい間柄でもある。之等三人の吾が最優秀なる登山家達が、未踏の氷河、峠乃至は峯頂の探査にかけて、一流の腕前を有する所へ、チューリヒの地形測量技師たるエルンスト・フーバーが第四人目として參加し、特殊の問題について努力を拂ふ事になつた。ヘールブルックのヴィルト商會はフルムのヘルプリング博士と共同で寫眞測量に必要な優秀な諸器械を貸與し、瑞西聯邦地形測量部では部長カール・シュナイダー氏の斡旋によつて必要數量の寫眞乾板を寄附された。エルンスト・フーバーは之等により興味ある問題を解決し且つ全く未知の地域たるコサ氷河一帶の寫眞測量を行ふ事とならう。フ！バ！の屬するチューリヒのE・T・Hは仕事の完成に協力する筈である。

遠征地域はネパール國の西、ガルワール・ヒマラヤである。かの聖河ガンヂスは此の地域に發源し全亞細亞からの巡禮者は數千年來この水源を訪れてゐる。ガルワール・ヒマラヤは英領印度のクマオン地方にあり北方は禁制國西藏に接する。吾々の關係ではアーノルト・ハイム、アウグスト・ガンサー並びにマルセル・クルツの三人が此の地方を縱橫に步いてゐる。既に登頂せられた山は一九〇七年ロングスタッフの登つたトリズル、ティルマン及びオデルのナンダ・デヴィ、スマイス等のカーメット及マナ並びに日本人によつて登られたナンダ・コート等である。遠征地域に直接關係ある、山名のあつて未だ登頂されない山を知るのも興味ある事と思ふので次に其の主なるものを揭げて置く。(標高米)

Bagini-Gletscher

Dunagiri……7065

Changabang……6865

Kalanka……6930

Kosa-Gletscher

Gauri Parbat……6715

Rathaban……6126

Hathi Parbat……6726

Satopanth- und Bhagat Kharak Gletscher

Badrinath……7137

Nilkanta……6600

ガルワール・ヒマラヤは瑞西のアルプス地方と最もよく似てゐる所で

新幕の湯の老夫婦

菊地孝

舊い話だが去る四月二、三日の連休を利用して一行五名、山形五色温泉より土湯へのスキーコースをやりました。板谷驛を下りて五色、青木小舍、家形、一切經のお定りのコースは、前日よりの降雪に惠まれて快適な滑走をなし、その日の宿泊地である仙鐵吾妻小屋へ着いたのが午後の三時頃。

丁度此の日吾妻小屋では鐵道關係のお偉方が大勢登つて來られ一泊するとの話なので、元々省營の小屋でもあるし、此れは吾々が如き「振り」のお客は隅つこの方へでも押し込められて終ふのが關の山と（唯何んとなく斯う想像したので）未だ日は高いし、今一滑り幕の湯か又は野地温泉あたりまで足を伸さうぢやあないか、さうすれば温泉にも浸れるし、明日が樂に成るとばかり元氣に任せて吾妻小屋を飛び出しました。

降雪に惠まれて一氣に降つたが、未だ釘附けで人の氣配も無く、豫期したものゝ少々がつかりであつたが、尙ほ快調のスキーに鞭打つて、直ぐ下にある新幕の湯まで滑り下りました。もう薄暮も迫り、風こそ無いが降雪しきりの狀態なので、此の新幕の湯に萬が一、宿の人が居らぬとしても一泊すべく、腰まで入る深雪を分けて温泉へ下つて行くと、突然宿の入口が明いて白髮の老婆がヒョッコリ首を出して居るではないか、やれ〳〵助かつたわいと一夜を頼んで宿へ上ると、圍爐裏に老爺が佗しく座つて居る。

此の老夫婦はよくも又外界と交渉を斷たれた雪の山湯に一冬を過せたものと、種々話を聞く程に、その無謀さに呆れ、現在の氣の毒さに心を打たれて終つた。東京者だと云ふ此の老夫婦は、温泉の持主から一冬の留守居を頼まれたさうで、自分自身も暢氣に冬の湯治と洒落た積りだつたのだらうが、冬が深く成るにつれ野菜物に不足して老爺は盲に成つて居り、その上手足ぬ凍傷に掛つて一歩も動けず、所謂懐血病の初期である、唯老婆が未だ元氣なので今日まで過して居たと云ふが、病人をかゝへて出るも引くも出來ぬ慘澹たる有樣である。幾ら雪を知らぬとは云へ、老夫婦の無謀さに驚いたものゝ、持主の惡辣さ（積雪中人が住つて居れば火の氣を絶さぬので屋根の雪が落ちるし家中が濕氣が來ぬそうだ）に、憤慨もした。

吾々の持つて居た食料品のせめても營養に成りさうなものを取り出して、老婦に與へ翌朝出發はしたものゝ、一歩も動けぬ彼等が今後どんな委に成るだらうか思ふ丈けでも肌に粟を生じ、土湯へ下る道すがら野地温泉の主婦にその事情を話して、何等かの處置を頼んで來たものゝ、快く承諾してくれた主婦が「天氣に成つたら野菜物を届けてやりませう」の言葉も、信じて良いやら、疑つて良いやら、土湯に下り、東京へ歸つてからも頭の何處かに慘めな老夫婦の委がこびり附いて離れない、何んとなく自分等の責任の樣にも感ぜられて、幾度か福島の警察へなり報告して善後策を取つて貰はうかとも考へたが、遂に多忙に取り紛れ今日に成つて終つた。

暖く成つた今日此の頃、幕の湯のあたりも、すつかり雪も消えて、春草が頭をもたげ初めた時節だらう、無論老夫婦の無事であらうとは心に念じ、斯く信じて居るのだが、あの時の憔悴した老爺の面差しや、元氣とは云へ老婆とても、何れは老爺と同じ運命を辿るものと淋しい想像が頭を馳けめぐる。

僕はたまらない氣持で、今日も居るのである。

ある。ヒマラヤとしてその山々は決して高い方ではない。此の美しい肥沃な地域では植物は四千米突以上の高地にまでも及んでゐる。吾々は時折山から溪に下り森林限界の上に天幕を張る事があるが、そこは人皆の知る如く、アルプスでも最も美しい場所となつてゐる。

次に遠征地域に至るまでの隊員の行動は、豫定通り行けば次の如きものとなる。ボンベイで隊員は一應分離する。アンドレ・ロッシュとエルンスト・フーバーはデラ・ダンにある印度測量局を訪問、ダヴィッド・ツォグは遠征隊の荷物に從つて最後の出發點たるラニケットに直行し、フリッツ・シュトイリはダージリンに赴き六人のシェルパを伴つて來る。ラニケットで運搬荷物の整理を行ひ、此處で四人の隊員は三十人から四十人の人夫を引連れ數ケ月に亘る文明との訣別を爲す。七日間の行進の末魅惑的なクアリ峠を踰え、バドリナートへの順禮道にある一村落ジュマグワールに至る。此處から遠征地域へは尙三日から五日の登高を必要とする。

登山の方の計畫は未だ確定して居ない。諸種の事情並びに、遲くも六月終り頃に起る所のモンスーンの襲來次第で決定される筈である。長い降雨期間登山家達は氷河の入口並びに低山地域を踏査する。晴天の續く秋になり、隊員が充分に氣候に馴化し且つ機會に惠まれたならば高峯に對する突擊をも試みる事とならう。

【追記】

ガルワールへは昨年獨逸からも遠征隊が這入つてゐる。餘白を藉りて隊員名と初登頂の山名を附記する。

隊員（獨逸山岳會員）

Professor Rudolf Schwarzgruber
Edi Ellmauthaler
Dr. Walter Frauenberger
Toni Messner
Leo Spannraft
Dr. Rudolf Jonas （醫師）
Lieut. S. H. J. Whitehead（輸送官）

初登頂山名

Sri Kailash	6932m	22742ft
Chandar Parbat	6728	22070
Swachhand Peak	6721	22050
Bagirathi North	6512	21365
Chatuarangi Bamak	6395	20981
Mandani Parbat	6198	20336

河野先生を憶ふ

武田鎌次郎

山の學者、河野齡藏先生は信濃の高原に漸く春が訪れて來た四月三日午前十一時に遂に逝去された。私が河野先生に初めてお目にかゝつたのは、私が報知新聞記者として松本へ赴任したその翌日、即ち大正三年五月二日であつた。當時松本女子師範學校は山の學者揃ひで河野先生と同じく山の學者である矢澤米三郎氏が校長であつた。河野先生はその當時も逝去される直前と同じく長軀の痩軀で女の樣なやさしい聲で而かも溫情を多分に含んだ人であつた。この時私は女子教育者として得難い先生であることを直感しそして偉大なる山の學者であることを知つた。

私は赴任第二日目にこの學界の偉人の知遇を得たことを大に喜び今でも深く德としてゐる、その時河野先生は島々の茗荷平に在るヘツトナー石は氷河石でない、あれは山崩れの時に生じた擦痕であると云ふことをお話し下さつた。私はこれを赴任の第一報通信として報知新聞學藝欄に約二段に亘つて書いた、その後京都大學の小川琢治博士や大關博士が河野先生の學說を反駁し又河野先生の學說に共鳴した學說も現はれ報知新聞紙上は東西學者の大論戰場となつて學界から非常に注目されるやうになつた。河野先生は更に地質學界に堂々の論陣を張り遂にヘツトナー石は氷河遺物から否定された。

私はそれから時々河野先生のお宅や學校をお訪ねして高山植物や高山動物の話を聽き新聞資料とした、こんな次第で何時の間にやら自分も山の趣味者となり河野先生の御伴で屢々登山するやうになつた、又登山者の遭難ニュースなども地理を教へて頂き詳報を紙上に送つたことは毎度の事であつた、それで滑稽なことには新聞社の方でも私を山の學者だと云ふやうになつたがこれは皆河野先生が蔭にゐて教へて下さつた賜物である。ヘツトナーの發見せる氷河遺物の如きは赴任早々特種と云ふので特別賞與金を貰つた上にその月から增俸された。

河野先生の登山歷は先生が長野師範學校の學生時代から始まる。その頃は飯綱山や戸隱山に登つて植物研究が第一歩で彼の戸隱昇麻の如きはその頃の發見である、卒業後は一層植物に心を傾け更に動物、次いで鑛物と云ふやうに研究調査の範圍を廣められた、日本アルプス連峰中登山者數の優位を占めてゐる白馬山の如きは先生が師範卒業後即ち明治三十一年七月に登山されてゐる、當時山に登るものは山麓民から「山荒し」と云はれて排斥されたものである、この白馬登山については同窓の學友で大町小學校の教師であつた岡田邦松氏と同行であつた、この岡田氏と先生は高山學者の双璧と云はれて有名な人であつた、先生は岡田氏が歿後研究敵手をなくしたとて非常に淋しく思はれた。尋常科五年生の教科書の内に「岡田先生の白馬登山の話」と云ふ課項がある。これは河野先生が岡田氏の學德を頌する爲に友人なる文部省編纂局の大野氏に依頼して織込ましたものである。先生は信州の山は勿論日本内地は云ふまでもなく北海道樺太地方の高山動植物の研究調査に毎年出張された。

先生は登山毎にいろ〳〵の珍貴な物を發見されてゐた、その數は實に夥しいが世間の學者などには發見者の姓名などを冠せるものがある、河野先生は實名的なことは大嫌ひで自分の發見したものでも容易に發表せぬ、自分に研究調査して自信がなければその道にかけての學者の教を仰ぐと云ふ風であつた。こんな有樣で東西の學者から先生の教を乞ふものが澤山あつた、先生の推薦で天然記念物に指定されたものも隨分澤山ある、そして研究も隨分深くその一例としてカモシカの皮一寸四方に何本毛があるかと云ふことを發表してゐる、實に面倒な人の餘り研究せぬ點にまで注意を拂つて居られた。そして人と爭ふと云ふことは大嫌ひであつた。斉つて先生が白馬山麓で發見された「アヲガヘル」の如きは某氏が自ら發見せる如く東京新聞に發表した時先生は何事も云はず知らぬ顏してゐた、最もその「アヲガヘル」はその新聞の發表よりは二年前に先生の著書「高山研究」に寫眞入りで掲載されてゐた。

大正五年八月東久邇宮稔彥王殿下がまだ陸軍中尉でゐらせられた御時槍ケ岳へ御登山遊ばされた、當時宮家におかせられても山の學者河野先生に御案内役を仰付られた、何しろ當時ださへ登山者が少ない日本アルプスへ竹の園生の御身で峻嶮槍ケ岳を御踏破遊ばすと云ふので河野先生は非常に恐懼感激して日夜その方面の研究を爲して御案内申上げた。その翌年同殿下は更に白馬岳へ御登山遊されたがこの時も先生が御案内役であつた、私も河野先生補助として扈從の光榮に浴したが殿下は河野先生に對し私共が呼ぶやうに「先生」とお呼びなり先生は全く恐懼し勿體ないことだと感涙してゐた。殿下の御質問に對しては極めて簡單明瞭に御答へ申上げた、殿下から專門的の突込んだ御質問に對し先生は自信のないことはハツキリと「存じません、後日調査の上更めて申上げます」と恐縮してゐた、こんな次第で他の宮樣の御案内でも非常に心勞を爲し一言一行容易でなかつた。

昭和五年李王殿下の那須野御用邸にロツクガーデンの建設を先生に御下命になつたことがある。その時などは外國からロツクガーデンの參考書を取寄せ樺太へ二回までも出張して高山植物を採集して來た、李王殿下はその竣工を御覽になり河野先生の人格、德望、學識について有り難きおほめの御言葉を頂き大に面目を施した。李王殿下は二回までも先生のお宅へ行啓遊されてロツクガーデンその他高山植物園などを親しく御覽になつた、先生の建設にかゝるロツクガーデンは松本市内に第一中學

校、第二中學校の外に松本記念館にある、この記念館にあるものは先生の畢生の事業として昨年五月から着手された、先生は炎天下に流汗淋漓心血を絞つて自家の庭園にある高山植物を惜しげもなく移植した、市の經費の都合で一旦工事を中止し本年五月から更に經續工事を起すことになつたが遂にその竣工をも見ず他界の人となつた。

私は四月一日上高地に於ける小島の放送調査を松本放送局から依屬されて河野先生の意見を聽くべく訪問した際、先生は病褥を出で親切に說明された後記念館内の山岳館及ロックガーデンのことを詳細に物語られた。然しこれが何人となく私への遺言の如く感じられたので大に元氣をつけて辭去した。四月三日果してこの物語が遺言となつたのは何と云ふ悲しいことであらう。

先生は斯の如く博物學の泰斗者であるのみならず寫眞、繪畫をよくしその著書には自ら撮影せる寫眞と自ら寫生せる挿繪を加へた。山岳に關する著書には高山研究、高山植物圖譜、日本アルプス登山案内、高山の氣象その他十數種、又中等學校教科書として博物に關するものは數種あるが何れも全國に普及されてゐる。

河野先生は前にも書いた通り名譽慾に冷淡で實名的行爲は大嫌ひであつた、嘗つて私が信濃山岳會の常任理事をやつてゐた當時先生は教育界から引退されて博物の整理に餘生を送ると宜言された時、先生の博物研究資金を廣く募集せんと企てたことがある、これを先生は斷乎として拒絶し「こればかりはお斷はりする」とて容れなかつた。誠に先生は教育者の典型であり謹嚴そのもののやうであつた。先生は平素酒には接近しなかつたが同窓會などに招待されて興が沸くと自ら琴を彈じ時には長唄を謠ふことがある。その節廻はしの如きは實に堂に入つたものであつた、而し如何なる場合と云へども姿勢を崩し脱線するが如きことはなかつた、先生の教育界にあること實に五十年、未だ嘗つて先生に對する陰なるものを聞いたことがない、殊に先生は口蚊しき女子教育には前後三十餘年の久しきに亘つてゐる。先生の人格、德望、學識に高きことは何人も肯定する處である、齡七十三歳でこの偉人を失つたことは慟哭するも尚足らざる極みである。

會員通信をお送り下さい

出來るだけ多くの會員の手になる「會員通信」欄はこの會報の生命と思ひます。極く氣輕に、紀行のみと限らず思ひついたときに、葉書へでも便箋へでも、長短を問はず書き下して、ポストへ投げ込んで下さい。質疑應答、會員相互の連絡と言ふやうなことにも、この欄は利用されてよいと思ひます。昊々も會員諸氏の積極的援助を望む次第です。

新著紹介

立山・劍岳 小笠原勇八 三省堂 三五判一一四頁 ・七〇 (五月)

著者の長い體驗と最近の踏破によつて濃い主觀を以つて編まれた案内書である。小册子ではあるが、極めて具體的なコンパクトな内容を持ち相當の經驗者にも參考とならう。

日光・鬼怒高原 矢島市郎 三省堂 三五判一二二頁 ・七〇 (五月)

日光、足尾、高原の諸山群や鬼怒川沿ひの溪谷を著者踏査の資料から親切に解說した案内書である。新らしいコースが澤山選んであつて、閑靜な山歩きが出來さうである。

岩と氷雪への登攀技術 海野治良 高橋照 三省堂 菊判一五八頁 三・〇〇 (五月)

寫眞を各頁に一種或は二種掲げて之に就き順序的に岩及び氷雪登攀の技術を說明した書である。

著者等が相當長い間岩壁を、或は氷雪の山を通して或は内省して躰得した人生觀から初まり、練習指導の一通りを說明して更に之等の技術を如何に實際の山に應用すべきかを寫眞と共に說き來つた小册子としては内容の豐かな、文字で說き難い處を寫眞に說明せしめて、大體に於て編輯も出來ばへが好い我國に今迄に無い指導本である。

而し此の本は相當な岩攀や雪の山に經驗の無い人でないと充分了解出來ない處も所々ある樣で、若し著者が今少し細かな點迄說明をされればいゝのではないかと思はれる處が所所にある。例へば綱の結び方の處でも綱だけの結び方の說明なり圖面があれば尚更好いのではないか、確保法なども殆んど同じ寫眞を三枚も並べなくとも、少しく變つて居る場所で確保法を說明して居る寫眞があれば尚ほ更にいゝと思ふ。

又登踏用具の說明に於ても(47 109 19)ハンマー、ハーケン、カラビナー、等の一つ一つの寸法形等の說明があると尚よい又ハーケンの打込む所の大寫しなどもあつてほしい、著者の一人は殊に好日山莊主であれば尚更これ位の行き屆いた注意はあつてもいゝと思ふ。

次にシュタイグアイゼンの着け方に就いても現在色々の方法が考へられて居る樣であるからその便利な方法に就き圖解的な說明もしてほかしつた。そして又その爪の數等に就きても雪質により山の季節により適否等多少の說明もあるべき處だと考へられる。

又堅雪乃至氷雪上に如何なる足どりをすべきかをも圖解あるべきかと思はれる、それに關聯してピッケルの扱ひ方をも、殊に相當な急斜面の氷雪上でピッケルによる滑落防止法は必ず充分に說明すべきでは無かつたか。若し、之は極く初步に屬する技術で說明の要なしとでも著者等考ふるならば、筆者は又著者に反問するであらう。何故に此の書を公刊したかと、試みにその例を冬期乃至春富士登山(著者は富士山は傾斜緩で雪上練習は不向と云ふが)に就いて見るに、その多くの登山者は頂上近くの斜面に於て如何なる場合も確實に滑落を停止せしむるだけの自信ある者が幾人登つて居るであらふか。この樣な事を充分教育するのが此の樣な指導書の重大な且つ親切な役目ではあるまいか。

軟かい雪でピッケルを根本迄雪の中に差し込み之に綱をかけても大した確保にはならないのではないか、又硬い雪ではピッケルは雪に深く差し込むことは出來ないし、結局はピッケルは確保用としては餘り期待出來ない者であることに就いてても一言なかるべからざる處だと思ふ。斯かる場合に最も安全な確保は如何にすべきか。

書中の圖解的の寫眞は概ねあれだけの難場で而も好く寫されて居ると思ふ、唯に山岳寫眞としても相當優れたものが多く、又山岳寫眞も幾多の困難を克服した後に出來るものであることを明かに教へる。撮影者の努力並びに之を助けて行を共にした同志等の協力の美しき心を寫眞を通して思ふのである。

說明的な寫眞とすれば自然場所は限られた處となるのは當然かも知れないが、又岩攀の場合に自由な撮影

本年度の「山日記」に就て

昭和十四年度の「山日記」も漸く去る六月二十二日に發賣の運びとなつた。改良すべき點も多々あり且つその計畫もあつたのであるが御承知の樣な時局の爲め、全く手も足も出なかつた。定價さへ上げれば多少滿足の行くものが出來たかも知れないが壹圓三十錢以上にはどう考へてもする事が出來ないそれでも二十錢の値上りで頁數は却つて減つてゐる。自由日記欄や白紙の部分が少なかつたのは萬々承知の上である。一ケ月に七日としての計算では學生諸君には不足であると思ふ。然し之も紙の豐富な入手が困難であつた事を考慮に入れて頂きたい。毎年同じ樣なものを出す事の無意義、從つて之を年刊的なものにする等の計畫、色々考へればきりがないがいづれはさうしたものに變つて行く事と思ふ。會友會員諸氏の御協力をお願ひする。プラン等も御持合せがあつたら御知らせ願ひたい。

本年版の定價は壹圓三十錢であるが會員には差額を會で負擔して壹圓四錢でお頒ちする。但し六錢の送料は別で、割引期間は七月末日までゞある。

尙校正完了後に到着した移動も可なりあるのでその分はいづれ本會報上に發表の豫定。

場所は考へられないが、少し慾を言へば岩場なども今少し廣い場面を撮し如何なるコースを採るべきかと云ふ樣な說明をも加へられると更に實際の役に立つことが多くなるのではあるまいか、例へば九〇頁から一一二頁に至る寫眞圖の間に岩壁と登攀のコースとの說明が一ケ所位あるべきかと思はれる。これが即ち應用技術の說明として大切であらう。

書中用語として英獨語を所々に使つてあるが邦語で充分役立つ處はそれを使つた方がよくはないか、例へば「シュタント」と云ふ樣な言葉は「足場」で充分間に合ふし、その意味が適切でもある日本語だ、又岩壁の登攀にクレッテルンと云ふ語が用ひられてあるが、クレッテライの方が適切ではないか。

又「積極的な傾斜」とは如何なる事を意味するか、何れ、登攀者が積極的に登攀意識に燃える樣な岩攀本來の持つ樣な傾斜を云ふのだらうと思ふが、一寸奇異の感を讀者に興さすのではあるまいか、雪上ピゾークの處及びスノーホールを鑿る處で、携行の荷にもならぬのだが道具で今少し勞作の能率を高める樣につき說明さるべきかと思ふ。ピッケルやスキーのテールで堀ることは實に勞多くして效果の極めて少いものだ。

原寫眞はいざ知らず、又文字と寫眞を同時に印刷せる爲めか、餘りにコントラスの强いものや、デテイルのつぶれた寫眞も所々にある樣だ。之れは印刷屋の技術でもあらうが、例へば一一七乃至—一三二、一三七等に於いて特に今少しく雪面のデテイルスがほしかつた。斯くすることに就いて一段と克明な說明的效果が揚ると思ふ。

撮影者としての說明が是非一章ほしかつた、これは著者の序の如く「山岳寫眞の一分野」として說明をすべき處である。

何は兎もあれ、本書は岩攀と氷雪技術の指導書として一新機軸を出した優秀な我國最初の試みであり、又それだけの成果を納める爲めに實際に（多くの場合にトリック無しで）活躍せし人々の技量及び努力に敬意を表する。

若し此の書によりてこれからの若い人が眞に山攀の自然を識り、增慢に陷らずして謙讓の而も熱意に燃ゆる教養ある山岳人を造り出すことが出來るならば我國山岳界の爲め、この書の效果を大いに多とするであらう。（昭和十四、六、六、額田）

◇會員通信◇

八方尾根から五龍へ

野口末延

四月二十九、三十日思ひがけぬ快晴に惠まれ八方尾根を登り唐松小舍に一泊五龍岳では四邊の眺望を滿喫して遠見を經て神城に下りました。

八方尾根では二、三個所スキーを脫ぎましたが、殆んど稜線近く迄使へあとはアイゼンに履替へました。

夜半には、石が飛び小舍に當る程の風でしたが夜明けには凪ぎ天氣は上々、スキーを背負ひ牛首、犬黑を經て白岳の鞍部に荷を置き五龍の頂上に立ちました。眼前に展開された北アルプスの大觀は物凄い程です、日本海の海岸線に明瞭に見えます、併し雨飾より戸隱方面に稍ガスがかゝつて居るのや遠く富士方面が見えないのは秋とは違ひ已むを得なかつたでせう。

白岳の鞍部で晝食を濟せ、此處でスキーを附け雪庇を崩して遠見へと滑り降り、途中鹿島槍のカクネ里を俯瞰したり、五龍の岩峰から八方尾根の彼方に見える白馬の峰々を眺めたり厭きずに遠見小舍に下りました。此處で御互の山幸を祝つたり、今年最後のスキー練習やらで二時間近く遊んでしまひました。スキーを擔いだのは精々十町位で神城の驛に着きました。

途中蕗ノ薹や、かたくりの花が群をなして美しく咲いて居る山路を通り驛へ着いた頃には、午後から崩れ出した天氣も雨となり、ポツリ〳〵落ちて來ましたが、思へば惠まれた山旅でした。

伯林より

高木正孝

とう〳〵スイスはグリンデルワルドが第二の故郷になつて了ひましたどうしてかうも心を惹かれるのか自分にも分りません。山ばかりでも、人ばかりでもないやうです。この北の國伯林などに歸つてくると、二週間をたゝない內に烈しい鄕愁に、第二の故鄕へのそれに伴はれてしまふのです。この獨逸は、氣が張つて、氣疲れがして耐え難く、一歩スイスに踏みこんだ時には全く救はれる氣持です、丁度故鄕に歸つたやうな！

三月は十日に伯林をたち、日獨學生會議に招待されて、チロールのキツツビユールに行きました。そこで山上のホテルに八日間滯在して廿五人づゝの日獨人達とスキーと會議をやつた譯です。街から山上まで高差六百米のザイルバーンがあつて、毎日下の街までスキーで降りました。

着いた翌日から毎日雪が降りつゞき、スキーには好適でしたが山は駄目でした。目の前にはカイザーゲビルゲ、そして近くの山頂からはグロースグロツクナーを始め三千米級の氷河の山が眺められたのですが。この附近は尾根がスキーをはいて通れるのでスキーのトウールには、もつて來いです。アルプとタンネと小さい岩との山です。

インスブルツクにも行きました。こゝも好ましい街です。チロールはこゝも獨乙になつても中々いゝ所ですが、たゞ到る所あの旗を見かけるのは、何だかあたりの山とそぐはないやうな氣がします。食物がまだ獨乙

本國のやうに非道くなつてゐないので、同行の獨乙人も日本人も餓鬼のやうに貪りました。

會議後三日ばかりキツツビユールにゐて、それからサンタントンを經て、グリンデルワルドへ、そこで田口兄弟と一緒になつて、フインシテラールホルンとフイーシエルホルンに登り、村へ戻ると會員の先輩別宮貞俊氏が來合せて、みんな揃つてワリスのアローラからコル・デランをツエルマツトへ越えるスキーの旅をしました。それから巴里へ廻つたのです。

田口達と別れて、小生獨り伯林に戻つたのですが、スイス、フランスで暮したあとのドイツ！　國境パーゼルの驛での感慨は御想像にまかせませう。

今晩からまたヴュルツブルグに開かれるナチの學生大會に招ばれて伯林をたちます、一週間の豫定です。山岳會の諸兄によろしく。五月廿日

會務報告

六月定例理事會報告

六月十三日(火)午後七時、本會事務所に於て開催

出席者、高頭、武田、小島、木暮、茨木、木村、藤島、高橋、額田、鳥山、吉澤、角田、石原、加藤、三田

一、山岳第三十四年第一號編輯報告

三十四年一號内容は大體前號會報報告通り、學校山岳部現役と聯絡をとり「山岳」の應援を依頼する

一、山日記編輯報告

六月二十二日發賣、定價一圓三十錢、詳細別記

一、會報編輯報告

六月號三分ノ二まで校了、往復葉書にて會員通信其の他を募る事を考慮中

一、山岳登山講習會の件

國立公園協會と協同(寧ろ應援)して行ふ建前につき加藤理事に一任とす

一、社團法人設立に關する件

一、登山團體の懇談會、角田氏に依頼す

一、新入會員詮考の件

小集會記事

第八十九會小集會は五月十八日午後六時半より藏前工業會館五階講演室に於て開催された。演題は會員沼井鐵太郎氏の「臺灣高山探檢の結末並びに今後の登山」で、氏の永年の經驗と研究を傾けられた極めて含蓄深いものであつた。詳細は「山岳」に發表の豫定。當日來會者會員外併せて四十二名。

昭和年11—13年收支計算報告表

收入ノ部	昭和11年度	昭和12年度	昭和13年度
	圓	圓	圓
會費	2859.00	2639.50	7129.50
入會金	310.00	210.00	175.00
諸利息	49.80	28.54	20.00
廣告料	5.00	——	39.70
雜收入	305.67	32.38	309.24
山岳賣却代	323.45	161.21	464.48
其ノ他	270.00	——	150.00
積立基金ヨリ借入	——	3725.83	——
前年度繰越金	2285.48	408.10	590.36
合計	6408.40	7205.56	8878.24
支出ノ部			
山岳費	1319.07	2031.86	2093.12
會報費	551.85	526.04	816.58
借室料	840.00	840.00	840.00
研究調査費	228.93	119.78	99.78
集會役員會費	292.05	140.48	123.89
幻燈室内設備	73.02	10.48	74.66
人件費	560.00	560.00	550.00
旅費	72.37	31.36	44.75
通信費	353.57	294.50	641.20
用紙文具費	292.81	350.28	355.71
電話費	73.60	92.20	94.09
雜費	244.67	31.77	197.34
臨時費	698.36	735.07	179.23
關西支部費	400.00	851.38	940.51
基本金組入	——	——	1500.00
次年度繰越	408.10	590.33	294.38
合計	6408.40	7205.56	8878.24

編輯後記

非常な遲延を先づお詫びせねばなりません。今更辯解がましいこともどうかと思ひますが、編輯者と印刷所との間に意志の疏通を缺き、無爲に時を過して了つたことも一つの原因です。次號よりは何等かの方法を見付けて、この不名譽を挽回したいと思ひます。

昭和十四年七月十日印刷
昭和十四年七月一一日發行
東京市豐島區池袋四ノ四五八
發行兼編輯者　石原巖
東京市芝區琴平町一(不二屋ビル)
發行所　日本山岳會
電話芝(四三)一六四九
振替東京四八二九
東京市芝區濱松町一丁目十三番地
印刷者　植田庄助
印刷所　成文堂印刷所